

第2章 歴史文化遺産の保存・活用の目標と基本方針

2-1 目標

福崎町の豊かな歴史文化を守り、育み、活かすためには、町民をはじめとした歴史文化の担い手が、歴史文化を大切に思うことが最も重要であり、さまざまな取組を展開する基礎となります。本計画は、そのような担い手の心を育むことを、計画づくりの基本理念としています。（「序-1 背景と目的」参照）

柳田國男のいう「美しき村」は、この基本理念と相通じるものがあることから（次ページ「コラム」参照）、歴史文化遺産の保存・活用の目標を次のように設定します。

目 標

“美しき村”を目指す歴史文化まちづくり

「福崎“つながり人”」※1一人ひとりが福崎町の歴史や文化を大切に思い、みんなで協力して、歴史文化遺産の保存や活用に取り組むことで福崎らしい歴史文化※2を育みます。

この福崎らしい歴史文化を、関係分野と連携しながら「定住の促進」、「教育の充実」、「産業の活性化」、「観光の振興」に活かし、それらの循環を支えることで地域の活力を高めます。また、一方では、その地域の活力を原動力として、歴史文化遺産のさらなる保存・活用の取組を展開することで、福崎らしい歴史文化により一層磨きをかけていきます。

このように、「福崎らしい歴史文化の育成」と「地域活力の向上」の循環（歴史文化まちづくり）を通じて、持続可能なまち（美しき村）をつくり上げていくことを目指します。

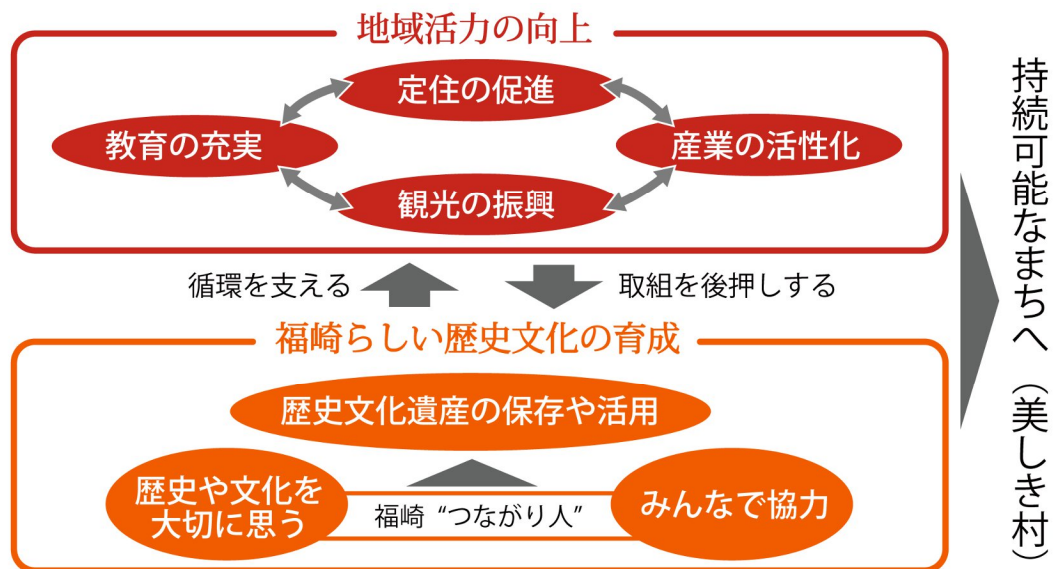


図 2-1 “美しき村”を目指す歴史文化まちづくり（概念図）

※1：「福崎“つながり人”」とは、『福崎町第5次総合計画 後期基本計画』で使われている用語で、福崎町に住む人（住民）、通勤・通学する人、町を舞台に活動・交流する人、町出身者や関係者、来訪者など、福崎町を想う全ての人々をさします。

※2：福崎町の4つの歴史文化の特徴（「人のつながりが育んできた歴史文化」、「自然とのつながりが育んできた歴史文化」、「神仏とのつながりが育んできた歴史文化」、「他地域とのつながりが育んできた歴史文化」）をさします。（26-27ページ参照）

柳田國男のいう「美しき村」とは

柳田國男は、昭和16年（1941）に発行した著書『豆の葉と太陽』に「美しき村」というタイトルの文章を載せ、自身の体験・経験に基づき、「美しき村」についての考えを論じています。

その概要は、次のとおりです。

柳田はかつて東北や信州を訪れた時、距離を隔てたいくつかの村の風景が似ていることに疑問を抱き、それは自然を生かし、尊重してつくられ、育まれてきた風景であることに気づかされます。柳田は、その風景の美しさは、村（人間の手による建物等）と周囲の天然（山川草木）との結び合わせによりつくり出されたものであり、「之を作り上げた村の人々の素朴な一致…（中略）…おのづからの調和が窺はれて、この上も無くゆかしい」^{注1}と記しています。

さらに、その美しさは、計画してつくり出すものではなく、歳月と生活とによりおのずとつくり出されていくものであり、「良い村が自然に美しくなつて行くのでは無いか」とも記しています。

願ひ求めることは他に在つても、人が集まつて作り上げたものは感動させる。多くの風景の発端を考へて見ると、寧ろ無意識にたゞ見ぬ世の同胞と共に、楽しみ悦んだ痕跡に過ぎぬものが多い。たまたま設計者の功績が記憶せられて居ても、その目的とした所は、必ずしも後人の礼讃するものと一致しない。…（中略）…

強ひて風景の作者を求めるとすれば、是を記念として朝に晩に眺めて居た代々の住民といふことになるのではあるまいか。

村を美しくする計画などゝいふものは有り得ないので、或いは良い村が自然に美しくなつて行くのでは無いかとも思はれる。たつた一軒や二軒の門の樹を目じるしとせず、誰が始めたとも無く全村一様に、真似でも流行でも無しに同じ植物がそちこちに茂つて居る光景、それこそは調和でもあれば又平和そのものでもあつた。

では、どのようにすれば、柳田のいう「良い村」（美しき村）にできるのでしょうか。

その答えは、次の文章から読み取ることができます。

村は住む人のほんの僅かな気持から、美しくもまづくもなるものだといふことを、考へるやうな機会が私には多かつた。

住む人の一人ひとりが、自然との結び合わせや古くからの人々の営みのなかで受け継がれてきたものを大切にする心もち、村全体が同じ方向を向いている村が「良い村」であり、そのような村がおのずと「美しき村」になっていくのだということです。

つまり、柳田のいう「美しき村」には、風景としての見た目の美しさだけではなく、人々が暮らす環境としての「良さ（美しさ）」が大切であることが示唆されており、これは現代の「持続可能なまち」^{注2}につながる概念であるといえます。

生活様式や価値観が多様化する現代社会においては、人々の志向はさまざまであり、地域社会全体で同じ方向を向いて取り組むこと自体が難しくなっています。しかし、そのなかで、先人が育み、伝えてくれた歴史文化遺産は、私たちが共通して大切に思えるものの一つです。

歴史文化遺産を手がかりに、福崎町全体が同じ方向を向いてまちづくりの取組を推進し、住み良い環境をつくりだしていくことで、持続可能なまち（美しき村）へと結び付けていくことが求められているといえます。

注1：ゴシック体表示の箇所は、『柳田國男全集』第12巻（1998.2，筑摩書房）からの引用です。（本コラム全体について同様）

注2：「持続可能なまち」とは、簡単に言うと、地球にやさしく、人にやさしい、未来に向けたまちといえます。低炭素・循環型のまちや高齢社会に対応したまち、安全性・防災性の高いまち、活力と魅力のあるまちなどの指標から捉えることができます。SDGsの目標11「住み続けられるまちづくりを」にもつながる概念です。

2-2 基本方針

第1章に整理した「福崎町の歴史文化の特徴」は、町民等をはじめとした多くの人々が、福崎町の歴史文化を知り、理解する手がかりになるものであると同時に、福崎町の魅力でもあります。「美しき村」を実現していくためには、その魅力を育み、活かすことで、「暮らしの場」、「教育・子育ての場」、「商い・生業の場」、「観光地」として選ばれる町へと成長していくことが求められます。

そのために特に必要となる視点は、福崎町の歴史文化の成り立ちや特徴を踏まえ、次の5つの点に整理できます。

～ 福崎町の歴史文化の特徴を育み、活かすための視点 ～

必要な視点1 各界偉人を輩出してきた地としての土壌を活かす

「人」は地域の資産・資源であるという認識のもとに、学校教育や生涯学習などを通じた次世代の担い手や専門的な人材の育成に重点を置いて、歴史や文化を大切に思う「こころ豊かなひとづくり」に取り組むとともに、それらの人材が生き生きと活躍できる機会を、まちづくりや教育、観光、産業などの各方面において充実させていくことが求められます。

必要な視点2 近世村落や旧村を単位とした人や村のつながりを活かす

現在に受け継がれる近世村落や明治期の旧村のまとまりを活かすことで、歴史文化遺産の保存・活用の取組を円滑に進めるとともに、歴史文化遺産をきっかけとしたさまざまなまちづくりの取組の展開を促して地域力の向上を図り、「自立（律）のまちづくり」につなげていくことが求められます。

必要な視点3 企業や大学などのさまざまな主体と積極的に連携する

工業団地や大学が立地する福崎町は、県内で最も高い昼夜間人口比率であり、また近年は、積極的な観光振興策により観光客も増加してきています。これらの関係人口・交流人口^{*1}と連携し、「福崎“つながり人”」が一丸となって、歴史文化遺産の保存・活用に取り組んでいくことが求められます。

必要な視点4 「民俗学のふるさと」を核としながら多様な歴史文化を活かす

これまで「民俗学のふるさと」^{*2}の魅力発信が中心で、その他の歴史文化は十分に活かすことができていませんでした。逆にいうと、このことはさらなる可能性を秘めていることでもあり、「民俗学のふるさと」を核としながら、さまざまな歴史文化に光をあてることで、歴史文化がつくる「福崎らしさ」を高め、活かしていくことが求められます。

必要な視点5 関連する地域と連携して魅力を高める

福崎町は、古くからの交通の要衝であり、他地域とのつながりのなかでつくり出され、価値が高められてきた歴史文化遺産が多くあります。関係する都市や地域と連携した「地域間交流」の取組を展開することで、その魅力を最大限に引き出していくことが求められます。

※1：「交流人口」とは、観光客など、一時的にその地域を訪れる人々のことをさします。

「関係人口」とは、移住した人など、その地域に住む人である「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のことをさします。観光以上・定住未満の中間的な概念を示す言葉で、具体的には、その地域が好きで頻繁に行き来する人や、地域内にルーツがある人、過去に住んでいた・働いていた人など、その地域に対して強い思い入れがあり、地域づくりに参加する意思のある人々が関係人口にあたります。

※2：厳密には「柳田民俗学のふるさと」と称すべきですが、柳田國男は福崎町での原体験を基盤の一つとして「民俗学」を確立したことを捉え、「民俗学のふるさと」と称しています。（83ページ※1参照）

「福崎町の歴史文化の特徴を育み、活かすための視点」を踏まえ、目標の実現化に向けた取組の基本的な考え方として、次の5つの基本方針を設定します。

この5つの基本方針を「『美しき村』を目指す歴史文化まちづくり」を推進するための大前提とし、福崎町の歴史文化の魅力の底上げや磨き上げのための取組を実施していくこととします。

基本方針※1

基本方針1 「こころ豊かなひとづくり」に取り組みます

先人を顕彰し、その生き方や功績を体験的に学びながら、各界偉人を輩出してきた地としての土壌を活かすことで、歴史文化を大切に思い、歴史文化遺産の保存・活用に取り組む人の輪を広げるとともに、歴史文化に係る専門的な人材の育成や活用を進めていきます。

基本方針2 「自立（律）のまちづくり」を進めます

近世村落を引き継ぐ33自治会や、自治会の区域を超えた4つの小学校区のまとまり（田原、八千種、福崎、高岡）などのまちづくりの単位を活かし、歴史文化遺産の保存・活用と、さまざまな分野のまちづくりの取組を結びつけることで、「自立（律）のまちづくり」をより効果的・持続的なものにしていきます。

基本方針3 「福崎“つながり人”」が連携・協働します

住む人とともに、通勤・通学する人、さらに町を舞台に活動・交流する人、町出身者や関係者、来訪者など、福崎を想う全ての人々（「福崎“つながり人”」）が協力して、地域社会総がかりで歴史文化遺産の保存・活用の取組を展開します。

基本方針4 歴史文化がつくる「福崎らしさ」を活かします

歴史文化遺産相互の関係がつくりだす歴史文化ものがたりをもとに、「福崎らしさ」を明確にし、福崎町の多様な歴史文化の魅力を守り・育み、暮らし、教育、観光、産業などのさまざまな分野に活かします。

基本方針5 「地域間交流」により歴史文化遺産の魅力を高めます

他地域とのつながりの深い歴史文化遺産については、関係する都市や地域との交流を深め、連携・協力しながら保存や活用の取組を展開することで、取組の効果を高めるだけでなく、多くの人々の興味・関心を惹く、より一層魅力的な歴史文化遺産として磨きをかけていきます。

※1：基本方針に示す括弧書きの用語は、いずれも『福崎町第5次総合計画 後期基本計画』で使われている用語です。それぞれ次の箇所・趣旨で使われています。

- こころ豊かなひとづくり：「まちづくりの基本方向」の「教育・文化（ひとづくり）」のなかで、こころ豊かなひとづくりをめざすことが示されています。
- 自立（律）のまちづくり：「まちの将来目標」のなかで、まちづくりの基本理念として使用されています。
- 福崎“つながり人”：「まちの将来目標」のなかで、福崎“つながり人”をまちづくりの人口として捉え、その維持・増加を目指すことが示されています。
- 福崎らしさ：「まちの将来目標」のなかで、まちの資源活用により“福崎らしさ”を明確にして、周知・発信することがまちづくりの重要な課題とし、“福崎らしさ”づくりに取り組むことが示されています。
- 地域間交流：「まちづくりの基本方向」の「教育・文化（ひとづくり）」のなかで、芸術・文化、文化財を地域間交流に活かす方向性が示されています。